

CATVはなにを変えるか

CATVが都市における新たな情報メディアとしてクローズ・アップされつつある。正直なところ その正体はまだ十分明らかにされているわけではない。憶測 推測 将来の可能性を含めて議論は発展するが いったいこの新しいメディアがどのような役割を果たし それによってつくられる社会が どのようになるのか 正確なイメージを持ちうる人はほとんどいないであろう。

しかし それにもかかわらず CATVはなにをかを変えつつある。それによる変わり方は 決して急スピードではないし広範囲でもない。ゆっくりと局部的に底の方から変えてゆくのがCATVである。これまでの情報媒体は ラジオにしる テレビにしる かなり急速にネットワークを広げていった。しかし その広げ方は いわば上からの広げ方である。ラジオやテレビは 大声でわめきたてるのにとえられる。これらはたちまち全国に普及した。北海道の先も先 利尻島までわたっても 話題になるのは NHKの帯ドラマであり 東京都知事選挙である。それは この狭い日本列島をまたたくまに一色にぬりつぶしてしまう。そこにどんな秘密のすき間も許さないほど日本列島というキャンパスは入念にぬりたくられてしまっているのである。

しかし CATVはちがう。それは決して大声にはわめきたてない。それぞれの仲間に ひそかに合図をし ささやき合う。一色に灰色にぬられたキャンパスに 鮮明なヴィリジャンの滴をおとしたり ひとはけプルシャン・ブルーの帯を描いたりするのである。しかし いまはまだ その色さえあらわれていない。CATVは むしろ灰色の底に沈んでい

る。いつか別の光があてられたとき それらがいっせいに鮮かなそれぞれの色彩を現わしてくるかもしれない。

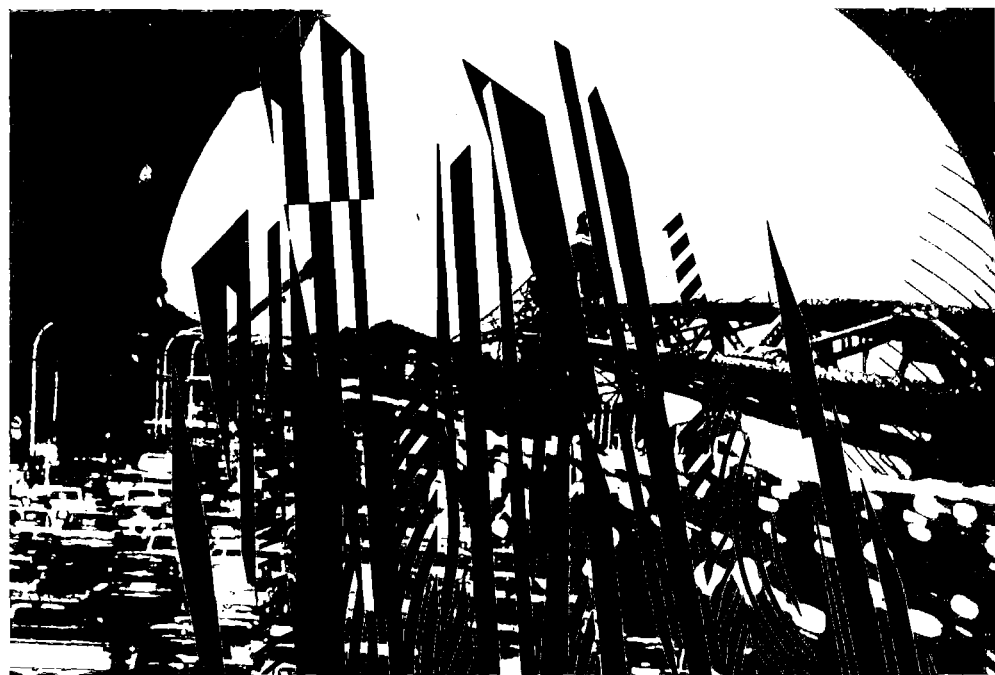
CATVは一見なんの変哲もない代物である。同軸ケーブル使用によるTVの有線送信。アナクロではないかという人さえもいる。そうだろう。1896年マルコニーの無線通信以来 ラジオ TVと電磁波は地球をかけまわった。通信衛星の出現がそれをいっそう助けている。しかも ラジオの長波 中波から テレビの超短波 テレビ中継やレーダーのマイクロ・ウェーブ さらにミリ波まで開発されようとしている。そればかりか レーザー通信まで研究されている現在である。無線による空中利用は まさに無限ともいえる発展をしている中で なにをいまさら有線による伝送をと言いたくなるひとひとも多いだろう。

特集：3

CATV出現の社会的背景

単元社会の解体と
多次元社会の誕生

田村 明 横浜市企画調整室



組むかに重点がある。それを局部的一地域を対象にしたCATVではアナクロだと感じるわけであろう。それにCATVは機能的にはまず難視聴対策に始まった。MATVとよばれるビルの屋上にある共同アンテナと類似のものでありことさらに新しいものではない。

このように一見アナクロニズム時代逆行とさえ思われるCATVがいったいなにを変えつつあるのか。それは確実なところは次の時代に聞いてみるほかはない。しかしそれは決して夢物語の未来ではない。アナクロともみえるほど確実な技術ベースの上に立っているのだから今日からすでに始められている。ただこれにどのような新しい機能が追加されるかあるいは新しい役割を追加されるかが将来の問題である。

現にCATVは初めはCommunity Antena Televisionとよばれる難視聴区域の対策のための共同アンテナであった。性能のよい受信設備で受け適当に増幅して送ってやるだけだったのがこれによってきわめて正確な画像がえられいままで混線して使用不能であった中間チャンネルが利用されるようになったのである。そして初めの難視聴対策とは次元の異なる中間チャンネル利用の自主放送を可能ならしめた。したがってCATVはCable Televisionともよばれ当初の難視聴対策という意味はうすれてきている。今後さらになにがとびだすかそれは将来である。しかし確実に言えることはまだまだ多くの可能性を有しているということである。いつかCの意味がまた変わってゆくかもしれない。いつも変わりゆく可能性を有するという意味ではそれはChangeable TVとよばれてもよいのかもしれない。

情報化社会の変貌

現代は情報時代とよばれ現代都市はまた情報都市とよばれる。現代社会は情報化社会である。情報化社会はマス・メディアによる情報の大量供給処理情報の均質化同時性化の進行であると考えられている。たしかにそれは現代のひとつの大きな流れである。しかしその故にこそ別な反作用が働いている。すなわちひとつは情報の大量供給にたいする選択性と自己主張であり第2は均質化にたいする多元化多様化であり第3にはフォーマライゼーションにたいするインフォーマル・コミュニケーションへの欲望さらに第4には情報化社会と虚像化から脱する参加欲望の増大である。

このような傾向は情報化がすすめばすすむほど顕著に現われる。もっとも経済的にも先進国であり情報化のいっそうすすんだアメリカでもっとも多数のヒッピーを生みだしているのはこの現象を物語っている。かれらのつくりだしているLSDやマリファナによる幻想社会はドラッグ・コミュニティともよばれるものできわめて不自然ながら完全に個人的な独自の情報世界を自らの意識の中につくりだしているのである。それは大量均質情報からの逃避であり反作用でありまたある意味では現代の情報化社会への挑戦でもある。

わが国ではアメリカほど極端にまでは達していない。しかしそれなりに情報時代の波におそれを抱くひとびとも意識的無意識的を問わず発生している。バークラブ喫茶店スナックそれにアジト仲間を求める。人間は均質化されナンバー化されることに本能的なおそれをもっている。人間というこの36

億人のすべてが相違した容貌体格性格行動をもった生物それがすべて均質化されてしまうことの方がむしろ不自然である。アメリカ人もドイツ人もまたベトナム人もタヒチ人もすべてが異なっている。そのそれぞれが異なっていることに意味がある。

もしひとりの人間がまったく同じ知識をもち同じ発想をし同じ行動をする相手に会ったならまったく自分と同じ容貌の人間に出会ったと同じくまったく不自然であり最大の驚異である。すべてが異なるかゆえに人間は存在する。もしまったく同じ人間であるならその人間同志が接することからはなにも生まれない。それぞれに異なる知識と発想と行動様式をもつがゆえに情報は成立し人間はおのおの収穫をえ新たな創造がそこに生まれる。男と男女と女からはなにも生まれないように同一化は創造の敵でさえある。

情報が価値をもつのはこのように相異なるからである。情報化社会は情報の多量化と均質化を指向するがこれは情報化の無価値化につながる自己矛盾を内包しているのである。情報化社会が永続するためには新たなメディアによる救いが必要なのである。

CATVの登場

CATVはこれまでになかった情報の世界である。それは対象範囲の広さという点からみればマス・コミュニケーションとパーソナル・コミュニケーションとの中間に位置することになる。

それは情報化社会の変貌により生じた反作用的要求と情報化社会のもつ即時性集団性などの両者がかねそなえているのである。CATVは一方において情報の大量供給が可能でありながら

また地域性という範囲では 自己主張と選択の可能性を留保したものであり 全国的情報の均質化にたいする 地域的多元化の要求に応えるものである。またフォーマル・コミュニケーションも行ないながら それ以外のインフォーマル・コミュニケーションを行なえる余地を残している。そして 情報化の虚像にたいして 必要な端末機をすえることにより 受信側が同時に発信者たりうる双方向性をそなえ 視聴者の参加欲望の充足を可能にしているのである。マスの世界からの離脱をのぞみながら かといってドラッグ・コミュニティにまでとびこむことができない大多数の大衆にとって CATVは新たな世界であり ひそやかな自己主張を回復しうる場となるかもしれないのである。

対象範囲でみると これと類似したメディアとしては 地方新聞 市町村等自治体広報 地域団体報などがある。地方紙を主体におく アメリカの新聞は やや類似のものが考えられる。しかし 一般に日本の地方紙は勢力が弱く しかも大体県単位になっているものが多い。

CATVがこれらと異なるのは なによりまず TVという画面をもった媒体であり その地域範囲が ケーブルという物理的な関係によって結び合わさっていることであり それは同時性 即時性をそなえており しかも 逆送信可能という相互性をそなえていることである。CATVは先にあげた類似物の機能を十分果たしながら これらとの相違をもつ。それはかりに対象地域が似ていても 情報機能としては かなり決定的な相違となるだろう。

CATVコミュニティ

近代大都市では コミュニティは壊滅

したといわれる。人間の活動範囲は拡大し 生活圏は交錯している。職場と住居は分離し 住居は 男子にとって単なるネグラ以上の存在でなくなってしまう。地域的問題は決してなくなったわけではない。学校や保育所の問題 病院や保健の問題 ゴミ処理や下水の問題 道路の舗装や交通安全の問題等々 地域的にしか解決をはかれない問題は山積みしている。ところが居住者の方の生活実態が 地域性を離れて拡大しすぎてしまったのである。

一方 新しいコミュニティの再建が叫ばれている。これらの地域的問題を解決し ひいては市民の生活を守るために なんらかのコミュニティの回復が必要だからである。現在のところ この大都市では 必要性は認められながらも コミュニティ再建へのテコを見出だしかねている。

このようなときにあたって CATVは 情報共同体をつくり出す可能性もっている。それは 地域への帰属意識とか 郷土愛とかいったメンタルな要素ではなく 具体的なケーブルによって連結され 同一の情報を共有するフィジカルな世界であるために 現代人にとっては抵抗なく実体として認められ 参加しやすい社会である。一見情報という目に見えないものを媒体としながらも それがビジブルなケーブルによって結ばれているこの共同体は 非可視的であると同時に可視的であるという現代的二重構造をもっているのである。共通情報を共有し しかも地域的限定性を有するという CATVの世界は 新しいコミュニティの姿を予測させる。

流動化と広域化という嵐の中でのコミュニティの成立は 単純な行政区画によるわりつけや 学校等の地域的施設だけ

では困難である。行政区画はもはや生活実態上の意味を持ちにくいし 地域的施設はこれに比べれば かなり意味をもつとはいうものの 限定された年齢層の間の問題でしかない。大都市における地域との結びつきは 情報共同化という新しい連帯を必要としているのである。

情報コミュニティの成立をさらに助けるのは 相互交信が行なわれたときであろう。共同情報は 地域的参加のもとでしかもリアル・タイムで行なわれる。

このような相互性が可能なとき コミュニティはより自発的なものとなる。それは政治的には直接民主制を情報世界の中で可能ならしめる契機になるだろうし 社会的には 茶の間に広がる映像と音による地域社会なのである。

このようなときに 従来の自治体も その枠をはみ出さざるをえなくなるであろう。都市や自治体は 情報手段を通じて より身近な実体として感じとられる。自治体ももう一度市民によりつくりなおされねばならないし またつくりかえられるであろう。

CATVの世界(1)——反管理社会

新しいコミュニティが再建されたとき人は 管理社会化にたいする抵抗の拠点を発見する。情報化社会=管理社会としてひとびとは 職場において 消費活動において また趣味的行動や レジャーでさえも管理される。この傾向は現在のところ ますます決定的である。管理社会に抵抗する唯一の方法は これまではそのような社会からの脱出逃避であった。情報からの遮断という時代の流れからの退行による方法は きわめて消極的である。CATVの世界は 管理社会にたいする第2の抵抗点の可能性を見出だそうとするものである。

もとよりCATVもまた地域的管理社会をつくり出す可能性はある。しかしそれは全国的ネットにたいしてはひとつのアンチ・テーゼであり、情報化による管理社会にたいして、情報化による非管理社会をつくり出すものである。CATVによって、そのような姿が可能になるためにも、前にのべたCATVによる情報コミュニティの成立が必要である。少なくとも、そこでは管理されない新しい情報をつくり出す可能性があるからである。

CATVのこのような世界をつくり出すには、その網があまりに広すぎたはいけない。経済的限界としての最低を確保する必要はあるが、せいぜい数万戸から数十万戸ほどのものが、それぞれその個性を競い合うのが望ましい。CATVが経済原則だけで大量化すれば、その持ち味が失われてしまう。各CATV局の独自性のもとに、さらにブロック別のネットを組むことは考えられる。これは異なる個性による集団化で、グループとしての意味が生まれた。しかしひとつの枠を単純に拡大することは、個性を圧殺してしまう画一化であり、CATVの自殺行為になりかねない。

CATVの世界(2)——ソフトな都市

CATVは、また都市のフィジカルな形態を変える可能性がある。情報チャンネルが増大したために、人間の行動から不必要なものを切り捨ててゆくことができる。たとえば買物はCATVにより、実物見本で地域の商店から示される。主婦は必要数量を言ってやれば、あとは自宅に配達される。学校も単なる知識教育の部分はCATVにより代行される。また研究者や事業家は、必要なデータをデータバンクと結んだCATVか

ら得ることができる。地域広報や地域の案内はもちろんCATVによって送られるし、緊急連絡にもあてられる。

ここでは映画さえあらかじめ希望をとり入れた番組が送られてくるし、その数も多いから、とくに大スクリーンを望まない限り、ますます映画館は不要になる。

この町では、不必要な人や車の交通は情報の流れによっておきかえられるから、道路を中心とした都市づくりは、ケーブルを主体とした新しい都市づくりに変えられる。実際幅員10メートルの道路を流れる情報量は、数ミリの同軸ケーブルにおさめられてしまう。それでも道路は必要だが、しかしその道路はみどころ比較的閑散としている。しかし見えないケーブルをとおして、この町は活発に動いているわけである。

将来は株の売買はもちろん、投票もこのケーブルで行なわれ、ひとつの企業でさえその大部分の機能を自分たちのCATVネットにおきかえてしまうかもしれない。

道路と建物というハードな町は、実は最低限のハードな要素であるケーブルと、これを流れるソフトな情報によって構成されるようになるのである。

CATVによる多次元都市

CATVのネットは、今後ますます複雑化していく。ネットは重複的にはりめぐらされていく可能性もある。アメリカでは魚屋の夫婦によって経営されているミニミニCATV局もある。また特殊なビジネス、証券、またレジャー用など、大小多数のネットが無数にはりめぐらされたとき、都市は多次元情報都市となる。単元的情報化は、相互チェックのコントロールをもたない情報としては、危険な

状態である。第2次大戦の開始時点や戦争ちゅうに、内閣情報局による単元情報によるあやまった情報に限定され、状況判断を強いられた記憶は、われわれに単元的情報の危険を教える。

このような中央統制的一元情報にたいして、多元的情報は一種の情報のゲリラ化である。そこには、どのような情報がどのように現われるかわからない。しかし現代の錯綜の中で、唯一の情報にたよることは、かえってことの真実を見失いがちである。真実はひとつであるとしても、情報は自由に多様化している方



がよい。それによると混乱はあっても一元化による情報の操作よりは、はるかに安定作用が働くからである。

CATVによる多次元情報都市が生まれてくれば、それは第1には情報に支配されるよりは、情報を利用し、情報をつくり出す創造性のある人間を育てることになり、また人間の個性をのばしてゆくことになるであろう。そしてオーソドックスな情報とローカル情報とゲリラ的情報の共存の中で、人間は管理社会にふりまわされず、かえって相対的に正しい情報を自らの判断でつかむことが可能になる。CATVによる都市とは、そのような人間性の回復と創造性と情報の主体的選択性を可能ならしめるものなのである。